

蜀記曰。昔有人、姓杜名宇。王蜀號曰望帝。宇死。俗説曰。宇化為子規。子規鳥名也。蜀人聞子規鳴、皆曰望帝。

の一文を指している。更に続けて『漢詩の事典』では、杜甫の「杜鵑行」の一部を引きながら次のように説明する。

この詩の杜鵑には、三点、注目すべきことがある。第一に、蜀（成都）の鳥とされていること。第二に、杜宇（望帝）の化身であること。第三に、杜鵑の、他の鳥の巢に卵を産みつける託卵の習性を取り上げて、これを望帝に対する臣下の忠誠として、描いていることである。この三点は、その後の杜鵑を詠する詩に、濃淡の差こそあれ反映されるものである。（中略）杜鵑が鳴く晩春には、躑躅が咲く。その花の紅さは、杜鵑の啼いて滴らす血によって染められたものと言われている。

（IV漢詩を読むポイント（用語）P 662）

以上、道真是、九句目から十二句目までの四句で「太宰府に着くまでの道中の心情・情景の概観」を詠い、十句目から十六句目で「太宰府に着くまで、とりわけここでは、京での別離の情景と心情」を、蜀の猿の故事と同じく蜀の望帝の化身である杜鵑の故事を響かせて、それがいかに非情で、過酷なものであったのかを言外に込めた詠いぶりとなっている。

（焼山 廣志）